



# 琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	高校生の保育に対する認識と性差の検討
Author(s)	浅井, 玲子; 前原, 武子; 田原, 美和
Citation	琉球大学教育学部紀要(61): 43-49
Issue Date	2002-09
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/1528">http://hdl.handle.net/20.500.12000/1528</a>
Rights	

# 高校生の保育に対する認識と性差の検討

浅井玲子\* 前原武子\*\* 田原美和\*

Sex differences of “child care” on homemaking education  
in senior highschool students

Reiko ASAI Takeko MAEHARA Miwa TAHARA

## はじめに

少子化、高齢化が現代社会のキーワードとされて久しい。

沖縄県は他県に比較して出生率が高く、子沢山であるというイメージが県内外に定着している感がある。実際に全国平均と比べると1999年の合計特殊出生率は1.79（全国1.34）と高くなっているが、人口維持のために必要とされる人口置換水準2.08をきっている点において変わりはなく、さらに減少していく事が予想されている。また、子育てに関する課題においては深刻なものがある。

多くの場合、現代の若い母親達は、未知に近い小さな子供達の養育に、1人で奮闘している。そのような母親の育児ストレスや抑うつが原因と考えられる悲惨な母子心中や児童虐待が後を絶たない。沖縄県男女共同参画白書（2001）によると、沖縄県ではそれらに加えて、結婚・出産の低年齢化、また離婚率の増加、妊娠中絶も20代、20歳未満は上昇傾向がみられ、若い女性の望まない妊娠や中絶が増えつつある。18歳以上の男女を対象にした総理府の「少子化」意識調査（1999）では、「子育ての辛い理由」として、金銭、体力根気の必要性、自由時間の削減、働けないことなどの理由が多くあがったが、子どもへの接し方が分からないとする理由も少なくなかった。また、土屋は子ども白書（2000）で、高度経済成長期に夫婦の

性別役割分業が定着し、父親モデルのない時代に育った現代の父親は、妻が育児のストレスを抱えている事が理解できなかつたり、父親は子どもと遊ぶ役割といわれても、父親に遊んでもらった事が無いので、子どもを「宇宙人」と感じてお手上げと思うのも無理のないことだとしている。

中央教育審議会「少子化と教育に関する小委員会」は、少子化への対応を考えるにあたっての留意点として次のことをあげている。（要旨）

- ① 結婚、出産等についての判断は、個人の自由な選択にゆだねるべき問題。
- ② 子育てを支援するための環境整備を行うにあたっては、子育ての理念が人々の間で共有されることが重要。
- ③ 子どもたちは社会全体ではぐくまれていくものであることを再確認し、大人一人一人が考え社会のあらゆる場で取り組んでいく必要があることを改めて認識することが必要。
- ④ 男女共同参画社会の形成を促進する視点から検討することも重要。子育ては男女が共同して行うことが当然であり、（省略）女性も男性も喜びと責任を分かち合える社会を実現するという観点から検討することが必要。

としている。

国民の基礎教養として学校教育の中で保育について学ぶのは、主として中学校の技術・家庭科、高等学校の家庭に関する科目である。これまでも、

\*家政教育

\*\*学校教育

中学校では、主に自分自身の成長を振り返るという視点から、高等学校では社会の一員として、主に親になるであろうという視点から保育学習は行われてきている。

更に、高等学校の家庭科は1994年度に入学した生徒から全員が必修となり、子育ては男女が協力して行うものであることを明示してきた。2000年告示（2003年度入学生より実施）の学習指導要領は改善の基本方針の一つに男女共同参画社会の推進をあげ、保育に関する内容の充実を図ったとしている。

これまで続いてきた、家庭科の男女共修か女子のみ必修かという議論から、どのような男女共修家庭科をめざすか、その内容が問われる時代となったのである。

生活実態の中で徐々に形成される性別役割意識が、子育てに不安を感じる社会を形成していく一つの要因だとするのならば、公教育としての保育教育の内容はどうあればよいのであろうか。

室（1999）は、家庭科教師から見た、中学・高校での乳幼児接触体験と保育教育の果たす役割について検討している。その中で生徒の実習後の感想文などから、生徒が幼児に関心をもった、親や保母さんの大変さを実感した、自分の生い立ちに興味をもち、親に対して感謝するようになったことを報告している。また、山崎・永尾（1983）は、高等学校における保育教育の研究において、卒業後の追跡調査を行い、高校在学時の適切な保育教育が、社会教育への積極的参加を促し、適切な育児行動へと発展することを推察した。

しかし、牧野・中西（1989）は高校生の「親になることへの準備状態」の形式に影響を与える要因の分析から、男子高校生より女子高校生の方に親になることへの良い準備状態ができていること、また、中学生以降に乳幼児と接した経験が多い生徒は将来親になることへの良い準備状態ができていることを明らかにしている。

「親になる事の準備状態」は、親としての資質の形成段階にある高校生の状態を示し、「乳幼児」「子育て」「親になる事」に対する態度によって測定される概念であり、保育に関わる意識などを総合的にとらえられるとしている。しかし、その調査対象は、いずれの男子生徒も家庭科を履修して

いない。次いで中西（2002）は「男女共通必修家庭科の実施が高校生の家族・保育に関する意識に与えた影響について高齢者観、親になる事の準備状態25項目の変化について調査し、共通必修実施前の家庭科未履修男子と共通必修実施後の家庭科履修男子との間にもっとも大きな差があったとしている。

また、宜保・亀谷・浅井（1998）は、沖縄県高等学校家庭科教師へ保育教育の実態アンケート調査を行ったが、男女ともに興味・関心を持ち積極的に学習に取り組んでいるとの意見の一方で、指導上の課題として男女の学習内容への興味・関心に差があり、授業態度にも出ているとの意見があった。例えば「出産のことは自分たちには関係ないとはっきり言う男生徒もいる」などであった。しかし教師の立場からの自由記述であったため、それが、少数の意見なのか、男女差によるのかについては明らかにはされていない。

一方、高校生との交流を経験した保育園の保育士や幼稚園の教諭からは、園児たちはダイナミックな関わり方をする男子生徒を女子生徒より好むとの感想も聞かれる。

つまり、親になるであろう男子生徒を視野に入れた教育内容の構築がこれからの高等学校家庭科教育の課題の一つである。

近い将来親になるであろう高校生の、保育学習直前の多面的な性差に着目し、学習内容について検討した研究は少ない。そこで、高等学校の保育学習前の男女差を明らかにすることによって、今後、男女が共に学ぶ保育学習の内容の検討、提案の基礎資料とすることを目的とする。

## 方法

### 1) 調査対象と手続き

沖縄県立 高校2年生418名

(男子211名, 女子207名)

2001年6月家庭科（「家庭一般」）の時間を利用して、家庭科教師の協力で、質問紙を配布、実施した。

デモグラフィック変数は表1に示すとおりであった。

表1 デモグラフィック変数

	男	女
① 家族構成		
核家族（両親）……………	70.1	62.8（％）
三世大家族（両親）……………	7.2	12.2（％）
その他（単親など）……………	22.7	25.0（％）
② 乳幼児の兄弟やいとこと一緒に住んでいる……………	17.1	17.4（％）
③ 親は、夜、たいてい家にいる……………	88.6	88.9（％）
④ これまでに幼い子どもの世話をしたことがある……………	56.9	74.4（％）
⑤ 何歳ころ親になりたいか……………	24.9	23.8（歳）

2) 学習前の保育に関する知識

高等学校家庭科教科書（家庭一般）から子どもの発達についての認識を問う項目を高等学校家庭科教師と相談し、11項目作成した。項目は表2に示す。子どもの発達について自分の考えと同じものに○を付けさせた。

3) 保育に対する肯定的感情の測定

幼児に対する肯定的感情を測定する尺度は、幼児に対する肯定的感情を測定する尺度と子どもに対するイメージを測定する尺度の2つから構成されている。

① 幼児に対する肯定的感情を測定する尺度

牧野・中西（1989）の「親になることへの準備状態測定尺度」を参考に、5項目を用い

た。項目を表3に示す。「全然ちがう」「少しちがう」「少しそう」「全くそう」の4段階評定により、高い得点ほど肯定的感情が高いことになる。

表3 幼児に対する肯定的感情を測定する尺度

1. 赤ちゃんの泣き声にはイライラする。※
2. 赤ちゃんの子守りをするのはおもしろい。
3. 小さい子どもの相手をするのはわずらわしい。※
4. 小さな子どもと遊ぶのは楽しい。
5. 赤ちゃんを見ると抱きしめたくなる。

※は逆転項目

表2 保育に関する知識：項目別の性別肯定頻度（％）

	男	女
1 言葉がまだ発達していない子どもに話しかけるのは意味がない。	2.8	1.4
2 言葉が発達しない間は自分の気持ちを他人に伝えることはできない。	6.2	5.8
3 赤ちゃんは寝てばかりいるから育児は楽だ。	2.8	1.9
4 1歳までにはじょうずに歩いたり、簡単な言葉を話す事ができる。	35.1	41.5
5 乳幼児期の思考の発達は、身体・運動機能の発達と関係がある。	58.8	55.6
6 視覚、聴覚も生後早い時期から発達している。	44.1	43.0
7 子どもがじょうずにできない事は、させない方がよい。	8.5	2.9
8 4、5歳になると、ルールのある遊びも理解できるようになる。	70.1	77.3
9 乳児でも、すでに個性がある。	67.8	75.4
10 赤ちゃんの体は、足から発達し、胴、頭部へと発達していく。	12.3	16.9
11 赤ちゃんにとって遊ぶ事が勉強だ。	91.0	97.1

② 子どもに対するイメージを測定する尺度  
 武藤・江口(1993)による幼児に対するイメージを参考に、明朗性因子(明るい・楽し  
 そうな・生き生きした・人なっっこい)など  
 17項目を作成した。「明るい↔くらい」など  
 対義語となっており、5点評定法を用いた。  
 得点が高いほど右側のイメージが高いことを  
 示す。各項目は図1に示す。

で回答を求めた。高い得点ほど親に対する認識や  
 感情が高いことになる。

5) 保育体験学習に対する期待

「保育体験学習(幼児との交流学習)すること  
 が楽しみ」「学校の授業で保育を勉強する事は役  
 に立つ」の2項目について、前者は「とても楽し  
 み・少し楽しみ・したくない・どちらでもよい」、  
 後者は「全然ちがう・少しちがう・少しそう・全  
 くそう」の4点法で回答を求めた。

4) 親や家族に対する接近意識

「自分の親について」と「自分の家族について」、  
 「全然考えない・ときどき考える・よく考える」  
 の3段階評定で回答を求め、「親が年老いたとき、  
 自分は親の近くにいたい」項目は「全くちがう・  
 少しちがう・少しそう・全くそう」の4段階評定

6) 幼い子どもの世話をした事があるか

幼い子どもの世話をした事の有無について回答  
 を求めた。

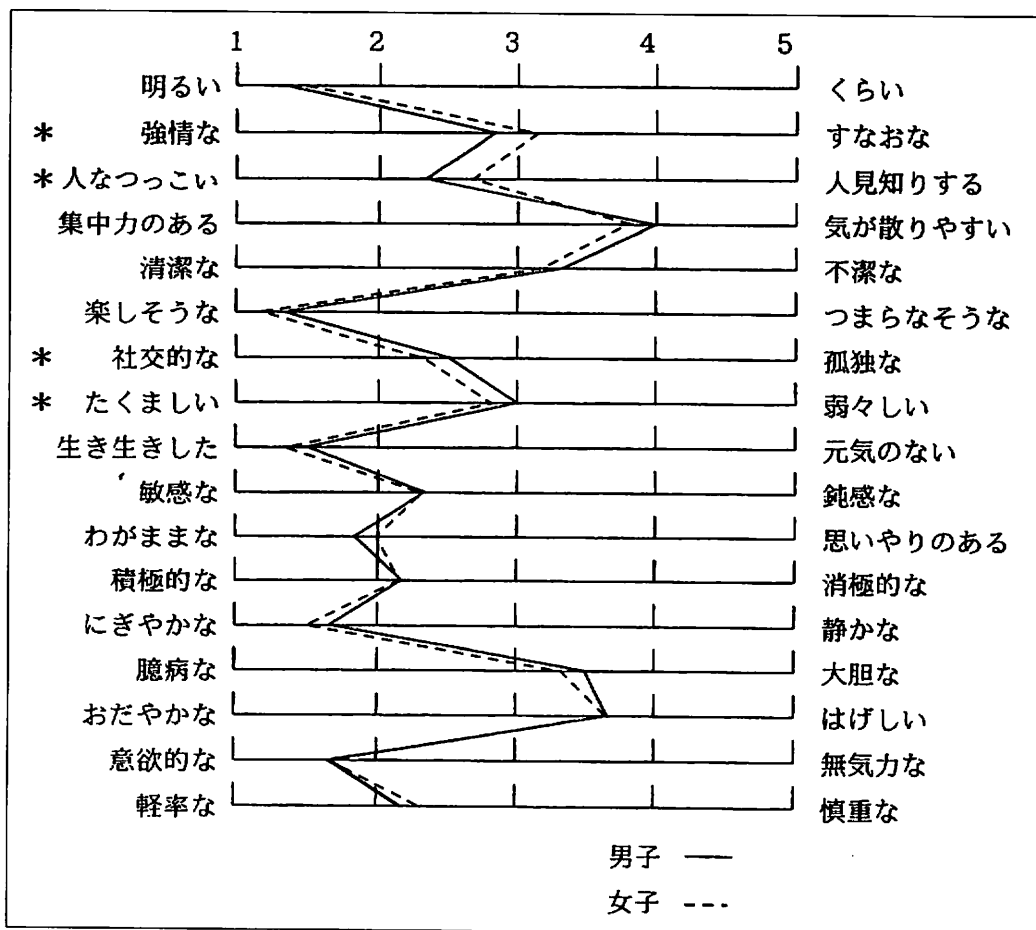


図1 幼児に対するイメージの平均値 (\*は有意差がみられた項目)

## 結果と考察

### 1) 保育に関する知識

各項目別に肯定頻度(%)を表2に性別で示した。

各項目別に肯定、否定と男女のクロス分析を行った結果、「子どもがじょうずにできないことはさせない方が良い」( $\chi^2=6.13$ ,  $p<.05$  男>女)と「赤ちゃんにとって遊ぶ事が勉強だ」( $\chi^2=6.93$ ,  $p<.01$  男<女)に有意差があった。

ただし、9割をこえる男女が、「子どもがじょうずにできないことはさせない方が良い」を否定し、「赤ちゃんにとって遊ぶ事が勉強だ」を肯定している。大きな性差は無いととらえるのが妥当であろう。

男女ともに、肯定と否定が相半ばする「乳幼児期の思考の発達は、身体・運動機能の発達と関係がある」や「視覚、嗅覚も生後早い時期から発達している」等を高校の保育教育の授業導入として取り上げ、授業作りをしていく事は、興味関心をひく要素となりうるのではないかと考える。

なお、今回調査したU高等学校は、ほとんど全員が中学校の技術・家庭科で保育領域を履修していた。中高を視野に入れた内容精選が必要である。

### 2) 幼児に対する肯定的感情の性差

#### ① 幼児に対する肯定的感情

幼児に対する肯定的感情、各項目の性別平均値、標準偏差を表4に示す。性差をt検定した結果、「赤ちゃんの泣き声にはイライラする」を除くすべての項目に有意な性差が見られた。それらの項目の合計得点にも有意な性差が見られ、女生徒が男生徒より高い得点を示し、幼児に対する肯定的感情を持っている事がわかった。

若い未婚の高校生も女性役割を獲得し、幼児に関する肯定感情を育てている事が推察される。

#### ② 幼児に対するイメージ

図1は幼児に対するイメージ各項目の性別平均値を示したものである。

高校生は、幼児を「明るい」「楽しそうな」「生き生きした」「にぎやかな」「意欲的な」など肯定的イメージもつ一方「気が散りやすい」ものとしてイメージしていた。

各項目について性差を検定したところ、「人なつっこい ( $t=2.831$   $p<.01$ , 男子<女子)」「社交的な ( $t=2.341$   $p<.05$ , 男子>女子)」「強情な ( $t=2.334$   $p<.05$ , 男子>女子)」「たくましい ( $t=1.983$   $p<.05$ , 男子<女子)」において有意な性差が見られた。

表4 幼児に対する肯定的感情における性差

項目	男子		女子		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
※ 1 泣き声イライラ	2.735	0.964	2.744	0.933	0.101
2 子守り	2.872	0.872	3.082	0.897	2.429*
※ 3 わずらわしい	2.853	0.922	3.111	0.893	2.905**
4 楽しい	2.986	0.892	3.266	0.826	3.329**
5 抱きしめたい	2.711	0.929	3.295	0.89	6.559**
合計	14.156	3.286	15.498	3.497	4.041**

※は逆転項目 p<.05\* p<.01\*\*

女子の場合「人なつっこい」「たくましい」幼児イメージを持ち、男子の場合「社会的な」「強情な」幼児イメージ傾向を持つ事がわかった。このことが幼児との交流時のかかわり方に男女差を及ぼす一つの要因となるのであろうか。今後の検討課題である。

### 3) 親や家族に対する接近感情

親や家族に対する認識や感情、それぞれの平均値、標準偏差を表5に示す。「自分の親についてどのくらい考えるか」「自分の家族についてどう考えるか」「親が年老いたとき、自分は親の近くにいたいか」3項目すべてにおいて1%水準で有意な性差が見られ、男生徒より女生徒で高い得点が見られた。女子における親和性・関係性の特徴を示す結果となった。

家庭の経営者とされた、役割期待が家族を思う感情に繋がっていくことも考えられる。

### 4) 保育体験学習に対する期待について

「保育体験学習を楽しみだ」「保育体験学習は将来役に立つ」の2項目について平均値、標準偏差、t値を表6に示す。いずれも男子<女子の有意な性差がみられた。家庭科は生活に必要な知識や技術を実践的、体験的に習得させることを教科

のねらいの一つとしているため、具体的に子育ての役割期待が大きい女生徒で家庭科教育への期待も大きくなったのであろう。言いかえれば、男生徒に対して保育体験学習への期待を高める工夫が今後の課題であろう。

### 5) 幼い子どもの世話をした事があるか

表1でわかるように、本調査の乳幼児の兄弟やいとこと一緒に住んでいるのは男生徒17.1%、女生徒17.4%とほぼ同じ比率にもかかわらず、「幼い子どもの世話をしたことがある」と答えた男女の比率には差があり、男生徒56.9%、女生徒74.4%で男子より女子の方が多かった。

このことは、性役割の中で女子の方が幼児の世話をすることを期待されていることを意味するのではないだろうか。つまり、構成的には同条件の家族のもとでも、男子は女子に比較して幼い子どもと接する機会が与えられていない。この事を考えると、家庭科教育における幼児との交流が特に男子で必要ではないだろうか。今後男生徒の家庭科教育の課題の一つと言えよう。

「学校の授業で保育を勉強する事は役に立つ」と考える度合いについて、幼い子どもの世話をした事があるか、否かと性の2×2の分散分析を行ったところ性だけが有意であり、性の主効果〔F

表5 親や家族に対する認識や感謝の気持ちの性差

項 目	男 子		女 子		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
1 親について	2.029	0.61	2.261	0.599	3.922**
2 家族について	2.048	0.625	2.242	0.607	3.215**
3 近くにいたい	2.75	0.86	3.06	0.84	3.8**

p<.05\*      p<.01\*\*

表6 保育体験学習に対する期待について

項 目	男 子		女 子		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
1 楽しみについて	2.583	1.149	1.836	1.025	7.011**
2 役に立つ	3.351	0.845	3.652	0.664	4.049**

p<.05\*      p<.01\*\*

(1/405) = 13.86,  $P < .001$ ], 交互作用も有意であった ( $F = 5.84$ ,  $P < .05$ )。すなわち、女生徒では世話経験の有無で差は無いが、男生徒では、世話をした事が有る者が無い者に比較して、役に立つと思う度合いが高かった。

家庭科教育における保育交流は、世話をした事がない生徒にとってより必要だと思われるが、世話をした事が無い事で期待度が高まらない事が問題とも言える。地域や学校、家庭の中で幼児と触れ合うという体験が更に幼児に対する学習の動機づけにもなるのである。したがって、意図的に幼児との交流の場を作り出せる家庭科教育はますます重要となっていく。保育教育についての内容、方法の検討が今後の課題となろう。

これまでの結果より、

- ① 知識には大きな性差は認められなかったが、幼児に対する肯定的感情は、女生徒が男生徒より高い得点を示し、有意な性差が見られた。
- ② 幼児に対するイメージで有意な性差が見られたのは、女生徒の「人なつっこい」「たくましい」、男生徒の「社交的な」「強情な」イメージであった。
- ③ 親や家族に関する接近感情では、女生徒が高い得点を示した。
- ④ 保育学習への期待は女生徒が有意に高かった。
- ⑤ 幼い子どもの世話の有無では、構成的には同条件の家族のでも、男生徒は女生徒と比較すると幼い子どもの世話をする機会を与えられていなかった。
- ⑥ 保育学習への期待について世話経験の有無×性の2×2分散分析の結果、男生徒では、世話経験の有る者が、無い者と比較して、役に立つと思う度合いが高かった。

今後は、幼稚園や保育園で、直に幼児の世話を経験した事による生徒の変化を検証していくことが重要である。

又、男女ともに「乳幼児期の思考の発達は、身体・運動機能の発達と関連がある」、「視覚・嗅覚も生後早い時期から発達している」等の知識については、肯定と否定が相半ばしていたことから、授業実践において興味・関心をひく題材となるであろうことが示唆された。

沖縄県は、文部科学省の2000年～2001年「高校生保育介護体験事業」研究指定を受け、県立高等学校4校、幼稚園2校が研究を進めてきている。そのような実践研究校の取り組みを含め、限られた時間の中でのより良い保育教育の内容、方法について検証していく必要があると思われる。

## 引用文献

- 1) 沖縄県男女共同参画白書 2001 沖縄県総務部知事公室男女共同参画室
- 2) 牧野カツコ・中西雪夫 1983 高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育(1, 2報) 日本家庭科教育学会誌, 32, 51-59.
- 3) 室雅子 1999 中学・高校での乳幼児接触体験と保育教育の果たす役割 家庭教育研究紀要, 21, 75-85
- 4) 山崎甲子・永尾忠子 1983 高等学校における保育教育の研究(第10報) 日本家庭科教育学会誌, 26, 69-73.
- 5) 中西雪夫 2002 男女共通必修家庭科の実施が高校生の家族・保育に関する意識に与えた影響(1-3報) 日本家庭科教育学会誌, 44, 336-360.
- 6) 宜保・亀谷・浅井 沖縄県における家庭科教育の実態(第Ⅶ報) 1998 琉球大学教育学部紀要53 263-278
- 7) 土谷みち子 2000 日本子どもを守る会編 子ども白書 148-149